

佳作

南 裕子さん 法学部法律学科 3年

「貧困の克服」 アマルティア・セン著 集英社

インド人の経済学者でアジア人で初めてノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センの講演を文章に起こしたのが本書。経済学というと数式やグラフをイメージして苦手意識を持っている人も多いと思うが、本書には一切でてこないのご安心を。著者は幼少期にベンガル地方の大飢饉に直面したこともあり、貧困をなくすにはどうすればいいかという問題意識を持って経済学に取り組んでいる。その為彼の研究は経済学と倫理学のハイブリッドのような特徴がある。本書では倫理的な側面が特に強く、小難しい話は一切でてこない。

彼の考え方の特徴は従来の経済学が効用（嬉しい、楽しい、気持ちいい）を基準としてきたのに対し、彼はケイパビリティという概念を基準に経済を考える。ケイパビリティとは潜在能力とでも訳されるのだろうが、要するに「それで何ができるようになるか」を考えようという話だ。例えば従来の経済学の効用アプローチでは自転車を手に入れたら「どれ位嬉しいか」を考えていたのに対し、センは自転車で「何ができるようになるか」を考える。「より早く、遠くまで移動できるようになる」というのが答えだろうが、これは足が不自由な人には当てはまらない。「足が不自由な人が自転車を手に入れて嬉しいのか？」そんなはずはない（もちろん自転車を観賞用のオブジェとして考えるなら別だが）。自転車を手に入れて嬉しいのは、それで移動できる範囲が広がるからだ。

「みんなが生活に困ったりしないで平和で幸せに暮らせたらいいよね、その為にはどうすればいいかな？」これを考えるのが彼の研究なんだと思う（乱暴なまとめ方になってしまうが）。そしてその為にはどんな能力が人々にあればいいかを逆算して考えていく。例えば、字の読み書きができないことは「生活に困ったりしないで平和で幸せに暮らす」上で障害になるから、みんなが読み書きできるようにしましょう、これがセンのアプローチなんだと思う。

「経済学って何のためにあるの？」、「数式やグラフいじくって楽しい？」と思っている経済学アレルギーの人（私もそうだった）にぜひ読んでほしいと思った。これを読んだからと言って経済学がわかるわけではないが、経済学が何の為にあるのか・何の為に小難しい数式やグラフと格闘しているのかはわかる。経済学に興味を持つきっかけになると思うので興味がない人はぜひ。